

Dr.ロバート・ペース

～名誉教授となる～

ペース先生は1952年以來勤務したコロンビア大学、ティーチャーズ・カレッジ（以下TCという）の音楽部を昨年で退職、名誉教授となりました。その時にTCの音楽部が発行しているニュース・レター「オーバー・トーン」にペース先生のインタビュー記事が載っていました。皆様にあまり知られていないような事もいろいろ書いてありましたので、ペース先生およびインタビュアー、シンディ・ベル（TC博士号候補生）の許可をとり、ここに紹介させていただきます。

（編集室）

☆ ☆ ☆

カンサスの幼年期

ロバート・ペースは、元來はハッチンソン・カンサスの出身であるが、第二次世界大戦で歩兵戦闘員（ヨーロッパ西部戦線）として勤めた後、1940年代末からニューヨークに移った。母親はピアノを独習し、父親は自分のことを音楽的でないと主張したにもかかわらず、間違った音を決して逃さず、姉はパイオリンのピギナーで、伴奏を必要とした。このようにして6才のロバートはピアノ歴を始めた。

まもなく彼と彼の姉は、その才能を認められて、地元のラジオ局のプログラムで毎週15分の「即興のかけ合い」をやるようになった。生放送のマイクロホンの前でブツケ本番の演奏をするため、初見奏の技術を身につけなければならなかった。「それは、」と彼

は懐かし気に思い起す。「よい経験でした。そして報酬さえもらいました。」

ティーン・エイジになったロバートは、ピアノに加えてトロンボーンをやり、高校生になるまでに中学生のピギナーのグループを教えていた。バンドのディレクターは、そのユニークな才能に気づき、彼をアシスタントの指揮者として活用した。恐慌後の日々のため、金銭的には不安なものがあったが、ペース家の子供たちは、いつも地域での最高のプロの音楽家たちの演奏をきく機会に恵まれていた。その中には、クライスラー、ハイフェッツ、ピアティゴルスキー、パデレフスキー、ラフマニノフ、ホフマンなどが含まれていた。ラフマニノフの前で彼が演奏したことは、後に1948年に卒業するジュリアード音楽院へ行く決心をする決め手となった。

ニューヨーク市のジュリアード音楽院に入学

ジュリアードで、ロバートはジョセフとロジーナ・レヴィン（Rosina・Lhevinne）に学び、ウィリアム・シューマン（William・Schumann）のもとで始まった《解釈法とマテリアル》と名づけられた実験的ティーチング・チームの一員となった。そこでは一つのクラスの中で和声、耳の訓練、初見奏そして即興などが関連して扱われた。

1950年代には、ジュリアードはTCからすぐ近くにあったので、ロバートはピアノ指導法の責任者であったレイモンド・プロウズ（Raymond・Burrows）が指導していた《クラス・ピアノ》教授法を見学することを思い立った。何を見たかったかは予約してあったと彼は述べている。そこでは学生たちが18～20台の粗末なアップライト・ピアノに向かい何人かが間違った音を弾いている以外は全員

が同じことを弾いていた。クラス・ピアノを見学したのははじめてであったが、彼はかなりの興味をそそられたと打ち明けてくれた。

「TCでは、グループ設定によって、私の1対1のレッスンでは、とうていできない教材と指導技術をカバーしていました。」彼はそのとりこになった。

マスター・プログラムをやっている途中で、ロバートはプロウズに招かれ、ピアノ専攻の4人の学生からなるグループをいくつか教えることになった。彼はグループ・ピアノ指導の中心人物としての道を歩みはじめた。

1950年のTCの音楽プログラム

「TCの音楽部は文字通り拡張の行なわれていた時期で大きな部門でした。」と彼は思い出を語る。TCは当時の主流をなす音楽教育プログラムを持っていたので、沢山のジュリアードの卒業生たちが、マスター学位をとるためにやってきた。働いている教師たちに便宜をはかるために、クラスは大量に金曜と土曜に組まれた。またフル・タイムの学生のために、ウィーク・デイは幅広いクラスを選択ができるようになっていた。

1950年代のTC音楽部の教授陣には、今なお音楽教育界の支柱を成している人たちの名があった。たとえば、当時主任教授であったジェームス・マーセル (James Mursell) は若いペースに様々なコースを教えるように奨励した。そのコースの中には、ペースの主要守備範囲であるピアノ指導の他に音楽史、分析法、解釈法やクラス・ルーム・メソッドなどが含まれていた。マーセルのTCでの最後の年、ペースはマーセルにピアノのレッスンをするため、毎週会った。「彼はユニークな学習心理学者で、非常に才気あふれた人物でした。」とペース教授は述懐する。

リラ・ベレ・ピッツ (Lilla Belle Pitts) は、「初期のクラス・ルーム音楽指導で名前の知られた人の一人で、その分野では広く信捧者を集めていました。」とペースは話を続ける。「理論と作曲の教授、ハワード・マーフィ (Howard Murphy) は、私の知っている最もすぐれた音楽家の一人です。ハリー・ウィルソン (Harry Wilson) はどんな種類の合唱でも奇跡のようにまとめました。ノーバル・チャーチ (Norval Church) は器楽指導と指揮法のために、当時のわが国で最も規模の大きいプログラムをつくりました。レイモンド・プロウズ (Raymond Burrows) は個人スタジオと公立学校の両面から、グループ・ピアノ指導のパイオニア的仕事を成し遂げようとしていました。」第二次世界大戦直後、TCのこの部門に500人もの学生を引きつけたのは、この顕著な一連の教授陣とこれに加えて特に優れた指導スタッフであった。

「TCは、もしあなたが音楽教育家になりたいのなら、行くべきところでした。」そこは、先生とは何をしなければならぬのか、そして、よりよい教師にどのようにしたらなるかを学べるユニークな場所であった。

「私たちは新しい教育のための試みと、質の高い演奏を続けることとの間にいつもいるよう奨められていました。音楽教師は、音楽的な演奏ができなければなりませんから」とペースは語った。70人からの人員で構成されていたオーケストラの中の沢山のメンバーは、すでにこの地域でもプロとして活躍していた。その他にも小さな室内オーケストラや様々な室内楽グループがあった。2つのTCの合唱団は定期的に練習を行い、大学の内外でしばしば演奏会を行った。オルガン専攻の学生は、今もミル・バンク・チャペルにある、当時は新しかったカサヴァント・オルガンを弾かせて欲しいと抗議していた。

ペースTCスタッフに加わる

TCでの博士号のための仕事を完成させながら、ロバートはジュリアードとTCの両方でピアノ指導教員として働いていた。そして彼は1951年に、プロウズの指導のもとで学位を取得した。しかし、1952年プロウズの予期せぬ死のために、彼らの共同研究は短命で終わってしまった。すでにプロウズのクラス・ピアノ教授法を遂行する要員の位置にいたペースは、鍵盤指導担当の教授であったプロウズの地位を引き継ぐように、主任教授のマーセルから懇願された。60年代以降、コロンビア大学には様々な移り変わりがあったが、その何年もの間、彼は学部の主任も勤めた。「ふり返ってみると」と彼は告白する。「めまぐるしく変わっていく世界の中で、音楽部の行方をヘルプしようと沢山の試みにチャレンジし、それに没頭もしましたが、この仕事についてまわる官僚的形式主義や、委員会報告が後続く委員会会合、それに経営のささいな点は、私の好みではありませんでした。それゆえ、もっと直接、私のエネルギーの方向づけを、教授法やその分野での活動に向けるべきだったと思います。」

「TCを去る機会は何度もありました。」とペースは言う。しかし、「とどまったことを残念に思ったことはありません。」とつけ加えた。TC在職中に、彼のアイデアは合衆国や沢山の外国に発展し広められるようになった。彼の教材は今、7カ国に訳されている。それに加えて、この長い年月の間に、彼は、インターナショナル・ピアノ・ティーチング・ファウンデーション(IPTF)とナショナル・ピアノ・ファウンデーションのエグゼクティブ・ディレクターとして、旅行し各地でセミナーを行う機会をもち、またTC



の音楽プログラムに外国からの研修生を沢山集めてきた。

ジョン・F・ケネディーの音楽委員会

1962年、ペースはジョン・F・ケネディー大統領のオフィスから電話をもらった。J・F・ケネディーは国の音楽教育を調査するため、特別委員会の4人のメンバーを任命していた。これはTCでの経歴が高く評価された経験だったと彼は語る。この大統領委員会は、音楽教育の新しい時代を生み、結果としてその中には、1963年のイェール会議(Yale Conference)がある。「残念なことに」と彼は言う。「あの暗殺によって、プロジェクト全体が崩壊してしまいました。それはこの国の音楽教育の転換期と成り得たのですが。」

ペースのクリスタル・ボール（将来的展望）

40年の音楽教育者としての経験から、我々の分野のこれからの方向を、彼がどのように考えているのか聞かせてもらった。彼は即座に言った。「私のクリスタル・ボールは明確ではない！」しかしながら彼は新しい黄金時代の独自の考え方を語ってくれた。「私たちの様々な学校のシステムの見地からつくられてきた音楽学習の方法は、変えられるべきです。音楽教育は〈豊かさ〉のためだけでなく、それ以上のものです。一方それは全く学術的なものでもない。しかしながら、音楽学習の多次元的な局面により、これを学ぶことで、他の分野の学習も強化することができます。あるいはするべきです。これは、いま私

が書いている新しい論文、〈音楽をたしなむことと、実際にあなたの骨、肉体そして、思考の中に音楽がある、ということの間には違いがある。〉というテーマと一致しているものです。」と彼はつけ加えた。彼は、音楽学習が政治家たち、特に現在の政治の動向の中で、不幸にも高い評価を受けられないについて述べた。「私たちは、生徒たちが自分自身の学習の中心になり、創造的に問題解決をしながら音楽を学んでいけるようにヘルプしていかなければなりません。」

〈TC「オーバートーン」

シンディ・ベルのインタビュー記事より

新海明美 訳〉

